

質の高い学びを目指す外国語活動

～異文化コミュニケーションを積極的に取ろうとする子どもを育てる～

辻 伸幸

本論文は、異文化コミュニケーションを取るといふ子どもたちにとって解決が少し難しい課題を与え、外国語活動の目標であるコミュニケーション能力の素地を充実させる質の高い学びを検証することが目的である。ゲームやチャンツ・歌などで楽しく英語の音声や表現に慣れ親しみ、買い物ごっこを行って1単元が終了するような外国語活動ではなく、子どもたちにとって異文化コミュニケーションを体験したり、準備したりする中で課題を解決していくことで質の高い学びを創り出すことが可能かを検証する。また、外国語活動における質の高い学びを支える条件も明らかにしていく。

コミュニケーション能力の素地を養うための3つの大きな柱として、「言語や文化への体験的な理解」、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」、「外国語の音声や基本的な表現の慣れ親しみ」が文科省より示された。以上の3つの柱を兼ね備え、学校研究提案が示している「自己」、「他者」、「対象」の3つの対話から考察することを採用した。

質の高い学びによってコミュニケーション能力の素地が築かれれば、誰もが異文化をもち、そのことに対して十分に敬意を払い、理解し合おうと積極的にコミュニケーションする子ども達に繋がっていくと考えられる。市民性を養わなければならない21世紀に生きる子ども達の必須要素である。

キーワード：外国語活動、異文化コミュニケーション、質の高い学び、コミュニケーション能力の素地、総合的な学習の時間

1. はじめに

いよいよ平成23年度から新学習指導要領が完全実施され、外国語活動（原則は英語活動）が、小学校高学年（5、6年生）で年間35コマ必修化になる。目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」ことである。

新学習指導要領が示されるまで、目標は曖昧であった。そのため、英語のスキルに重点を置くような指導も可能であった。スキル習得型の外国語教育を受けてきた教員にとって、指導しやすい面もある。しかし、スキル習得を目指せば、小学生の発達段階や教員の指導力等から考えて、中学校入学前に英語嫌いの子どもの増産する危険性が大きい。したがって、国が示した目標は、正しい方向であると言える。

新学習指導要領では、外国語活動が独立した必修領域となったため、「総合的な学習の時間」と切り離して指導することも可能になった。外国語活動単独で、目標とするコミュニケーション能力の素地を養うことはできるのであろうか。それは、かなり難しいであろう。また、高学年の子どもたちの興味・関心を高く保ったまま、目標を達成させることは、更に困難であろう。

この問題に対する解決法の一つとして、「総合的な学習の時間」と「外国語活動」を有効に関連させて異文化コミュニケーションを積極的に取ろうとする機会を多く含む単元を構成し指導する方向を提案する。しかも、子どもたちには質の高い学びのある異文化コミュニケーションを経験させたいと考えた。

外国語活動における質の高い学びは、辻(2009a)の考え方を継承した。簡単にその考え方を示すと、子どもたちにとって解決が少し難しい課題（ジャンプのある課題）を与えて、コミュニケーション能力の素地の充実を図ることを学びの質として捉えること。「自己」、「他者」、「対象」の3つの対話で質の高い学びを成立させることである。

2. 外国語活動における質の高い学びを

支える条件

2. 1 異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーション（Cross-cultural Communication）の定義は多様であるが、本論文では、バーグラント(2003)の考え方を前提とする。

バーグラントが提唱する異文化コミュニケーション

は、外国人とのコミュニケーションに限定されていない。人は、誰もが異文化をもちながら社会生活をしている。異文化の具体的な例として、年齢文化、地域文化、職業文化、遊び（趣味）文化、宗教文化、少数民族文化、身体の状態（障害者）文化、国民文化などが挙げられている。したがって、日本人同士でも異文化コミュニケーションが成立するということである。異文化を乗り越えてコミュニケーションをとる力が、21世紀に生きる子どもたちに必須であり、外国語活動の目標にも合致する。

基本的には相手に対する敬意や異文化を受容しようとする態度が必要である。

歌やゲームで楽しく英語に慣れ親しんだり、簡単な英語を使って、買い物ごっこをするだけでは、質の高い学びを引き起こすことはできない。異文化コミュニケーションというジャンプのある課題をいかに提供するかが重要である。

2. 2 外国語活動における「自己」、「他者」

「対象」における3つの対話

以下に、本研究で設定したそれぞれの対話でどのような質の高い学びがあるのかを挙げる。これらは、外国語活動の目標ともなっているコミュニケーション能力の素地でもある。なお、この方法は、学校の研究提案に沿ったものである。

「自己」との対話

- ・ 相手と何を伝え合うのか、その内容の吟味
- ・ 進んでコミュニケーションを取ろうとする意欲
- ・ 交流する相手を尊重し自分たちの考えたことを伝えようとする態度
- ・ もっと上手に伝えたいと思う向上心
- ・ 外国語が使えたという自己肯定感
- ・ コミュニケーションが取れたことへの感謝

「他者」との対話

- ・ 友だちとの対話
- ・ オーストラリアの交流小学校子どもとの対話
- ・ アメリカのロン・クラークアカデミー生徒との対話
- ・ 京都外国語大学学生との対話

「対象」との対話

- ・ 英語の音の慣れ親しみ
- ・ 英語のリズムの慣れ親しみ
- ・ 英語の語彙の慣れ親しみ
- ・ 英語の表現の慣れ親しみ
- ・ 英語の文字の慣れ親しみ

- ・ 非言語コミュニケーションツールの使用
- ・ 日本語や英語への言語としての気付き
- ・ 異文化の理解

これらの内容を、子ども達が充実させ、伸ばしていくことができれば、質の高い学びができたということになる。

2. 3 総合的な学習の時間

総合的な学習の時間の特徴は、地域や学校、子どもたちの実態に応じて、横断的・総合的な学習や子どもたちの興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かして展開できることである。

本研究では、異文化コミュニケーションの機会とそこのための準備を総合的な学習の時間に計画的に組み入れた。異文化コミュニケーションの機会は、次の3つで設定した。それぞれ、課題を明確にして、伝える内容を協同して考えたり、工夫して準備作業をするなどした。

・ オーストラリアの交流小学校子どもと

オーストラリア・ビクトリア州立スカイ小学校の子どもとテレビ会議システム・国際郵便・インターネット上の交流ページを使って学校行事や教科、作品を伝え合う異文化コミュニケーションを行った（写真1,2）。

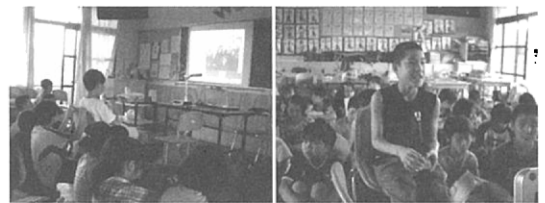


写真1

写真2

・ アメリカのロン・クラークアカデミー生徒と

アメリカのアトランタ州にあるロン・クラークアカデミーの生徒たち43名を附属小学校に迎えて合同授業、和歌山城案内などを行った（写真3,4）。



写真3

写真4

・ 京都外国語大学学生と

京都外国語大学のバーグラント教授が担当する異文化コミュニケーションの授業に参加した（写真5,6）。



写真5



写真6

3. 外国語活動における学びの質を探る研究方法

子どもたちにとって解決が少し難しい課題となる異文化コミュニケーションを積極的に取ろうとする中でコミュニケーション能力の素地の充実を図ることを学びの質として捉えている。では、学びの質の高まりをどのようにして検証するのか、次に述べる。

よく、子どもたちが目を輝かせて活動しているので、素晴らしいと判断することがある。しかし、そのことが質の高い学びであるかどうかは判断できない。外国語活動では、子どもたちが何に対して目を輝かせて、行動することができるかを検証することが必要である。もちろん、その行動はコミュニケーション能力の素地づくりに関連している必要がある。

本研究では、「自己」、「他者」、「対象」の3つの側面から整理して、検証しようと試みている。その方法は、指導者や授業観察者の授業の直接観察、ビデオや画像による間接観察、子どもが行う振り返り（自己評価や他者評価）やアンケートによる尺度評価や自由記述などのデータから判断することができる。

4. 学びの質を高めた外国語活動の展開例

ここでは、オーストラリア・ビクトリア州立スカイ小学校との異文化コミュニケーションを紹介する。

単元は、「教科を伝えよう」であり、全5時間計画(図1)で実施した。

4. 1 スカイ小学校

スカイ小学校は、ビクトリア州都メルボルンから南に車で1時間のところにある自然豊かな所にある州立の小学校である。プレップ（日本の幼稚園に相当）から日本語を教科として学んでいる。オーストラリアでは、小学校から多言語教育が盛んで、日本語は人気の高い言語の一つである。

スカイ小学校とは5年前から筆者が受けもつ学級の子どもたちと交流活動を続けてきている（辻，2008, 2009b, 2010）。今年度は、スカイ小学校がオーストラリア政府からの助成を受け、附属小学校とインターネット上での交流サイト（写真7）を立ち上げることができた。ここでは、アバターを作成して自己紹介（写真8）を行えたり、ビデオ、画像をお互い見て異

文化交流を図ってきた。今年度、計3回のテレビ会議システムによる異文化コミュニケーションの機会をもってきた。第1回は、お互いに特定の交流相手を決めて、交流相手との初顔合わせであった。事前に、郵送による自己紹介絵手紙を交換してあった。第2回は、附属小学校の運動会で踊ったソーランと音楽で学んでいるリコーダーの演奏を披露した。



写真7



写真8

4. 2 単元「教科を伝えよう」

この単元は、英語ノート1のLesson8「時間割を作ろう」を発展させた単元である。自分たちがどのような教科を学習しているのか、小グループに分かれて伝えようとするプロジェクトである。プロジェクトの最終目的は、インターネットを利用したテレビ会議システムで、日豪の教室を同時につないで教科を紹介することである。単元構成を図1に示す。

第1時	教科に関する英語の語彙や表現に慣れ親しむ（聞くことに焦点を当てて）
第2時	教科に関する英語の語彙や表現に慣れ親しむ（発音することに焦点を当てて）
第3時	教科に関する英語の語彙や表現に慣れ親しむ（第1時と2時を深化させて）
第4時	テレビ会議システムを使ってリハーサルを行う（写真9）
第5時	スカイ小学校とつないで実際に教科を伝える（写真10）

図1



写真9

写真10

第3時までは、異文化コミュニケーションを実際に行う時に必要になってくる語彙や表現に慣れ親しむ活

動を計画した。指導方法は、子どもたちにとって負担を少なくして、しかも興味をもって行えるように、辻(2010a)を適応して指導を行った。ゲームやクイズ、カード遊び、チャンツ等で、趣向を変えて楽しく慣れ親しめるようにした。

また、慣れ親しんだ語彙や表現を使って、いきなり異文化コミュニケーションの本番に入るのではなく、その前段階として、シミュレーション的な活動を第4時に組み入れた。この過程を踏むことで、異文化コミュニケーションという少し困難な課題を克服していくための安心感や自信を得ることができた。具体的には、学校内の離れた2教室を使用して、テレビ会議システムでつなぎ、交互に教科を紹介し合った(写真9)。

こうして、スカイ小学校の指導者と電子メールで打ち合わせをして、教科を紹介する異文化コミュニケーションの本番を実施した。附属小学校の子どもたちが伝えた教科は以下であった。

国語：簡単な絵本の読み聞かせ
書写：毛筆の漢字を使ったクイズ
算数：計算問題
体育：縄跳び
社会：世界の国クイズ
家庭：裁縫と調理の実演
理科：上皿天秤を使った実験
音楽：合唱と楽器演奏
図工：自分たちの作品の紹介

スカイ小学校からは、授業で行っているダンスを紹介してくれた。また、合同でできるじゃんけんゲームを行った。さらに当日の様子は、スカイ小学校との交流サイトで見ることができた。

本単元では、外国語活動の単元に関連させて、総合的な学習の時間を利用して異文化コミュニケーションを行うための課題解決的な活動を行った。具体的には、教科を紹介するための小グループの編成を行ったり、各グループでテレビ会議システムでどのようにして相手が分かりやすく興味をもって見てもらえるような工夫を考えさせたり、準備物を作成したり、グループごとの練習を行ったりした。

5. 単元「教科を伝えよう」の考察

ここでは、2.2で提案した学びの質の高まりを見る3つの対話から考える。

「自己」との対話では、教科紹介で何を伝えるのか考え、単元が進むにつれて、もっと上手にしようとする姿勢が、授業中の直接観察、ビデオ、写真から確認することができた。また、英語を使って教科紹介をすることができたという満足感、成功感、成就感をその後の振り返りで子ども自ら感じていることが分かった。

「他者」との対話は、まさしくスカイ小学校の友だちとの異文化コミュニケーションである。外国語活動では、この「他者」との対話に必然性あれば、質の高い学びが成立する。オーストラリアは時差が少ないためテレビ会議システムを使えば、オンタイムで異文化コミュニケーションをもつことが可能である。しかも、単発ではなく、計画性をもって複数回もてたことも必然性を高めたと言える。

「対象」との対話では、英語における音、リズム、語彙、表現に十分、慣れ親しむことが無理なくできた。さらに、教科を伝えるための工夫(実演、クイズ、地図、国旗、絵本などの使用)をすることができ、コミュニケーション能力の素地を拡げることにつながった。「対象」との対話においても授業中の直接観察、ビデオ、写真から確認することができた。

6. 成果と課題

附属小学校とスカイ小学校の子どもたちが、テレビ会議システムを使った異文化コミュニケーションを積極的に行う中で、「自己」、「他者」、「対象」の3つの対話で質の高い学びを成立することができた。結果として、外国語活動の目標である「言語や文化等の体験的理解」、「積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度」、「外国語の音声や基本的表現の慣れ親しみ」の3つを深め、コミュニケーション能力の素地づくりにつながったと言える。

異文化コミュニケーションを取るために、日本人をも含めた世界の多様な人々と、必然性をもたせた機会を計画的に組み入れていくことが今後の課題である。また、本論文では、扱うことができなかったが、バークランドが提唱する日本人を含めた異文化コミュニケーションを計画し、検証していくことも必要である。

参考文献

- ジェフ・バークランド. (2008). 『日本から文化力—異文化コミュニケーションのすすめ』. 現代書館.
- 辻伸幸. (2008). 「英語嫌いを生み出さないためには」. 河原俊昭編. 『小学生に英語を教えるとは?』. 株式会社めこん
- 辻伸幸. (2009a). 「小学校英語活動における授業展開のプロトタイプ開発」. 『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第59集.
- 辻伸幸. (2009b). 「国際交流活動を通じた言語や文化の体験的理解に挑戦」. 影浦功・小学校英語セミナー委員会編『小学校英語セミナー』No34. 明治図書
- 辻伸幸. (2010). 「小学校外国語活動における実践：学びの質を高める協同学習」. 『英語教育』第59巻第4号. 大修館書店